# チョコレートのヒミツのお味

妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チョコレートのヒミツのお味

【Ｎコード】
Ｎ５５４６Ｒ

【作者名】
妃

【あらすじ】
チョコレート。それは甘くて、ちょっとほろ苦い、不思議な味がする。それを食べると、幸せになれる。きっと、私でも幸せになることができる。神は、幸せになりたい。人より、十倍も、百倍も・・・・・。けれども、神は自分でチョコを作ることができない。だから、人々にチョコを作らせ、食べた人を食べる。そのために、神は私達に試練を出した。自分が幸せになるために――。そんな、チョコを作るために、楽しい生活を送る主人公と、ゆかいな仲間たちの学園ストーリーです☆

# 序章～神の試練～

昨日と違う喜びが、今日という新しいページに思い出を刻む。
それは、楽しくて、嬉しくて、甘いのだろう。けれども、いいことだけじゃなく、辛かったり、苦しかったり、悲しかったりと、ほろ苦い部分もある。
それはきっと、甘くてほろ苦い、チョコレートに例えられるだろう。
そしてそれを食べると、幸せになれるに違いない。
けれどもそれは、とても貴重で、きっと誰も食べることができない。私さえも、きっと・・・・・・。
だから、人々は幸せになることができない。そして、誰もが生きることにもがき、苦しみ、力尽きていくのであろう。
しかし、世の中の人々は言う。

”幸せだ”と――。

それはきっと、自分でそのチョコレートが作れたんだ。苦労を重ね、思いを込めて、作ったんだ。幸せだと思うのはきっと、作れたという証。そして、自分がココにいると実感するのだろう。
それで、人々が楽に、簡単に幸せを手に入れられないように、自分で作らせるために、神は私達にそのチョコレートを作らせるようにした。それを食べた人々を食べるために、試練を出したんだ――。

## 序章～神の試練～（後書き）

おはっとこんにちこんばんわ☆
妃です。このたびは、私の小説を読んでくださり、ありがとうございます。まだまだ、これには続きがあり、きっと読むのにあきると思いますが、面白いと思ってくださると嬉しいです。それでは、次回をお楽しみに。

## 第一章～ハラハラな始まり～

校庭に咲く桜が、私達の入学式を歓迎しているかのように散っている。

季節は春。今日は四月七日。王塚女学院、通称王女の入学式。

私は晴れて王塚女学院に合格。

「桜がきれいね」

そう声が聞こえ、後ろ振り向くと、そこには新入生だと思われる女の子がいた。もちろん、この場に男性がいることはありえない。なんせ、ここは女子高だからな。

いるとしても、きっと教師しかありえないだろう。もしくわ父親など。

「そうですね」

そう答えると、その女の子は私に近づいてきて、

「私、今日から入学する、夏原李夜といいます。よろしくね」

と、かわいらしい笑みを浮かべた。

「よろしく」

私は微笑んで答えた。

「途中まで一緒に行ってもよろしいでしょうか？」

「もちろん」

私達は、校舎の前のクラス表をみにいった。

「えっと・・・」

クラス表の前までくると、彼女は自分の名前を探し始めた。

私もそれを見て、自分の名前を探した。

「あっ、あった！　私は一年Ａ組みだわ！」

喜ぶ彼女をみて、

「そんなにＡ組みがよかったの？」

「ええ。Ａ組みは優秀な人しか入れないといわれていたくらいですの。母上と父上に必ずＡ組みにはいれといわれていたものだから、

ちょっと心配していたの」
彼女はホッとしたようにいうと、さっきまでの笑顔とは違う笑顔を見せた。
「それはよかったですね」
私もつられて笑う。
「夏原さまー！　夏原様はどちらにおいででしょうか！？」
遠くから女の人の声がきこえた。
焦っているような、叫んでいるように思えた。
「夏原・・・・・・って、夏原さんのことじゃありませんか？」
「そうみたいね」
夏原さんは笑顔で、
「それでは、またどこかで」
そういってその場から去っていった。
私は手を振り、にこっと笑った。
「さて、私の名前は・・・・・・あ」
私は自分の名前をすぐに見つけた。
「一年・・・・・・A組み・・・・・・」
私はボソッとつぶやいて、その場に立ち尽くしていた。
しばらくして、先生の掛け声で、体育館に集まった。
まさか自分がA組みに入れるとは思っていなかったもんだから、夢のように思ってしまった。
「次に、新入生代表からあいさつです」
「ねぇねぇ、知ってる？　今年の新入生のあいさつって、理事長の孫らしいよ」
「そうなの！？　あまり関わりたくないね」
周りからそんな声を聞いたが、私は夏原さんを探すことで精一杯だった。
「夏原さん・・・・・・どこにいるのかしら？」
そう思っていると、マイクの声を伝って、私の耳に、聞き覚えのある声が聞こえた。

私はすぐに壇上をみると、そこには彼女がいた。
「みなさん。校庭の桜も芽を膨らませ、歓迎の舞をしております。私達は今日、王塚女学院に入学します。みなさんが憧れていた高校生活を、思う存分楽しんでください」
そういい終わると、彼女は壇上からおり、自分の席へと向かった。
私は呆然としていた。そのあとの入学式については頭に入らなかった。
「夏原さんが、理事長のお孫さん・・・・・・だって？」
周りに聞こえないくらいの声で、私一人、頭の中で整理をしていた。
入学式が終わり、教室に戻った私は、自分の名前が貼ってある机を探した。
「二の川の一番後ろか」
私はそういって、自分の名前の札をはずすと、席についた。
教室はにぎやかだった。
同じ中学校だった人がほとんどだったから、別に孤独しているわけではないが、なんだか疲れがどっと出た気がした。
私は机にうつぶせになると、ひんやりとした机の気持ちよさに心を惹かれ、しばらくそのままでいた。
五分くらい経っただろう。
なんだろう。さっきまで騒がしかった声が、急に静かになったな。
「いつまで寝ているのですか？」
「え？」
聞き覚えのある声に反応して、顔を上げると、そこには、夏原さんの顔があった。
「な、夏原さん！？」
「なんでしょう？」
名前をいうと、にっこりと微笑む夏原さん。いつの間に・・・・・・。
「えっと・・・・・・もうすぐＨＲが始まるかしら？」

「はい。だからこそ、起こしたのですよ」
そういうと、私の隣の席に座った。
「もしかして、夏原なんの席って・・・・・・」
「はい、ここです」
笑顔でいう彼女に対し、私の心を折れていた。
嘘でしょ？　理事長のお孫さんが私の隣って・・・・・・。終わった。完璧に終わったわ。
心が折れている私に対して、夏原さんは、
「同じクラスでしたのね。一年間よろしくお願いします」
あの時みた笑顔と同じ笑顔の夏原さんに、私は頬を引きつっていた。
これが彼女との、波乱万丈な一年の始まりだったのだ。

## 第一章～ハラハラな始まり～（後書き）

なんだか、よくわからないストーリーですね（笑）
ところで、主人公の女の子の名前は？って感じですけど、それは次回出てきますので、お楽しみください。
それでは、次話でノシ

## 第二章～彼女について～

やってしまった。
そうだ。彼女は私と同じクラスだ。だが、それが最悪ってわけではない。
彼女・夏原李夜は、理事長の孫である。そして、誰もが彼女に関わりたくないという。
私も・・・・・・一応関わりたくない人の一人である。
理事長の孫ときいたら、それは誰でも近寄りたくないと思ってしまうだろう。何をいわれるかわからない、どんなことをされるのかもわからない。”理事長の孫”とは、神のようなものといってもいい存在だ。
「どうかなされて？」
顔色を悪くしている私とは裏腹で、元気な笑顔を向ける彼女に、私は心の中でため息をしていまった。
「いえ、大丈夫です」
私は無理な笑顔をすると、彼女はまた笑顔でこういう。
「何かあったらいってくださいね？　私、友達ができて嬉しいです」
「友達？　誰が？」
「あれ？　違いましたか？　私はてっきり友達になったのだと思ってのですが・・・・・・」
彼女は少しがっかりした様子で、小声で話した。
「いえ、私も友達になれて嬉しいです」
慌てて彼女を元気にしようと思い、笑顔で答える。
「本当ですか！　私、嬉しいです」
彼女は再び笑顔を取り戻し、私は一息吐いた。
危ない危ない。何かいったらきっと理事長に愚痴をいったりするわ。
心の中でもやもやと考えごとをしていると、担任の先生がやって

きた。
「はい。みなさーん。ＨＲはじめますよー」
かなりのロリ系キター！　とか、心の中で思いつつ、私は制服をただし、いすに座りなおした。
「一年Ａ組の担任になった、夕張香織です。年齢は聞いちゃダメよ？」
「はい」
クラスみんなの返事が、余韻を残して教室に響く。
「それでは、皆さんに自己紹介をしてもらいましょうか」
先生がそういうと、みんな「えー」といって、不満げな顔した。
「文句はいっちゃダメなのです！　名前と、どこの中学校からか、好きなことや、何部に入りたいかと、最後に一言をいってくださいねー」
先生は笑顔でいう。
自己紹介か。なんていえばいいんだろ。
考えているうちに、もう順番がきてしまった。
私は立ちあがると、大きめな声でいった。
「えっと・・・・・・。桜塚中学から来た、天王寺弥生です。好きなことは、特になく、いろんなことをするのがすきです。部活は、なるべくならたくさん入りたいです。よろしくお願いします」
そういい終わり、席につくと、周りの席からヒソヒソ話がきこえた。
内容はいたって普通。ただ、中学のときもこんな感じだった。
「天王寺って、あの天王寺！？」
「うそー！　私、知ってるよ？　年収一千億円とか！」
「知ってる？　このあたりのビルとか会社って、全部天王寺さんの経営なんだって！」
「天王寺って、中学のとき、全部の部活に入って、全国優勝したんでしょ？」
「私、あいつに近づいたり告白すると、絶対に将来いい仕事につけ

なくなるって噂きいたよ」
「聞いたことあるよそれ！　あと、テストとか全部百点ばっかりで、もし一点でも落ちたら、学校のせいにするんだって！」
などなど、たくさんの噂が飛び交った。
こんなの慣れてる。なのに――。
「いいかげんにしなさい！」
私の隣の席からガタっと音がした。隣を見ると、夏原さんが立っていた。
「そんなの噂でしょ？　もし本当だとしても、彼女に失礼だわ！　私なんて理事長の孫よ？　もしなにかしたら言いつけられるなんていうけど、私は普通の生活を送りたいわ。それに、祖母とは仲が悪いの。なにかいいたいのだったら、直接祖母にいうべきだわ！」
彼女は話を終えると、席についた。
周りの女子たちはしょんぼりした顔で、机のほうに顔を向けた。
それを聞いた私は、いつの間にか立ち上がって、口が勝手に話していた。
「私は、普通の高校生活を送りたい。みんなと平等な生活を送りたい。私は私。両親の仕事なんて知らないわ。だから、こんな私でも仲良くしてほしい」
みんなはしーんとしていた。
我に返ってみると、急に恥ずかしくなって、すぐに座ってしまった。
あとから夏原さんも座った。
心の中ではドキドキしていた。
時が止まればいいのに、そう思っていても、なぜか時計の針は動いたままだった。
そして、いつの間にか自己紹介が進んでいき、彼女の番になった。
「夏原李夜。梅里中学校からきました。好きなことは、おしゃべりをすることかしら？　部活では、そうねぇ？　入ってほしいってあれば、そこに入るかな。最後に、祖母とは本当に仲が悪いの。だか

ら、私は祖母について何もいうことができないです。よろしくお願いします」
そういい終え、座った。
そして、ＨＲは幕を閉じた。
今日はこれでおしまいだから、下校するだけだった。なのに、
「ねぇねぇ、天王寺さん」
「はい？」
「これから用事ありますか？」
「いえ、特にはありませんけど・・・・・？」
「なら、私に付き合ってくれませんか？」
「え？」
「あ、いやでしたか？」
「いえ、全然。大丈夫です」
「よかった。私、ちょっとお手洗いのほうにいってきますので、帰りの用意をして待っていてください」
「はい」
彼女は鞄を机の上において、教室を出て行った。
「なんか、新鮮な人だな」
私はポツリとつぶやくと、帰りの準備をした。
しばらくすると、彼女は戻ってきた。
玄関までいくと、玄関の靴箱をあけた。

ドサドサドサ

何かがなだれるような音がした。
大量の手紙だ。
「な、なにこれ」
私の靴箱からあふれでたたくさんの手紙。
私はそれを一枚手にとって、中身をあけてみた。

「天王寺様へ
変な噂に惑わされ、天王寺様と距離を置こうと思っていました。
けれども、天王寺様の言うとおり、天王寺様は天王寺様ですものね。
そんな天王寺様に一目ぼれしてしまいました」
内容を読んで把握した。
そして、ほかの手紙をちらっと見る。
私の人生は、バラ色に染まることはないのだろうと、確信したのであった。

## 第二章～彼女について～（後書き）

やっとでてきました。「天王寺弥生」なんか、お嬢様みたいな感じがしませんか？
私だけでしょうか？　次回もお楽しみに☆
そして、ここまで読んでくださったみなさま、誠にありがとうございます。これからも、私のおままごとに参加してくださると嬉しいです♪

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5546r/

チョコレートのヒミツのお味

2011年3月19日23時59分発行